

第23回環境情報科学センター賞 受賞者

学術論文賞

受賞者：小林昭裕 氏

(専修大学経済学部)

対象業績：情報学および行動心理学的アプローチによる
山岳遭難特性の把握と対応



【受賞理由】

登山者の山岳遭難は、コロナ禍でいったん減少傾向に転じたが、最近では再び増加基調にある。その予防や被害軽減は、初心者を含む登山者の増加が予想されるなかで、重要な課題であると考えられる。

このような背景のもと、受賞者は、国内における山岳遭難の予防や被害軽減の方策を探るために、遭難事故データの分析に基づく情報学的側面、登山者の認識や行動の分析に基づく行動心理学的な側面からのアプローチを試みてきた。

その成果は、過去5年間にわたり、当センターが刊行する「環境情報科学論文集」に査読付き論文5編（いずれも第一著者）として掲載され、一定の学術的評価を得てきた。これら一連の研究の主たる成果は以下の内容から構成される。

第一に、実際の事故発生状況が反映された県警察の山岳遭難記録をもとに、採集行動、スキー行動、一般登山の区分で遭難特性を比較検討し、行動形態の違いに応じた対策の必要性を指摘した。また、一般登山に関し、山群、山城、個別山城の3つの異なる空間スケールでの比較検討をおこない、相互の共通点や相違点にもとづいて、遭難対策における着眼点や山城ごとの対策のあり方や課題を提示した（対象論文①）。

第二に、遭難事故に至る過程でのヒヤリハット体験を対象に、その主要因と背景・間接要因の特性や相互の関連性を分析し、要因の連鎖に着目した遭難予防対策の必要性を指摘するとともに、登山者の認識・行動面において注視すべき対象や特性を指摘した（対象論文②）。加えて、登山者の山岳遭難のリスクに対する注意度、事前情報取得、気づき、予見回避等の関連性を分析し、リスクへの注意度の違いが、事前情報の獲得、リスクの察知や認知、予見回避に及ぼす影響等を明らかにし、遭難軽減を図る上での登山者自身の認識や行動、登山者への普及啓発のあり方や課題を示した（対象論文③）。

第三に、遭難に係わる要因に対処する各主体（登山者、国や県等の管理者、ガイド・山小屋）の役割・責任に対する登山者の認識を分析した。その結果に基づき、遭難要因のタイプによって、登山者からみた自身、管理者、ガイド・山小屋の役割・責任に対する認識が異なることなどを明らかにし、遭難要因やその特性に対応した主体間の協働的体制の構築の必要性や課題を示した（対象論文④）。

なお、上記の成果を含みつつ、関連する国内外の既往研究および報告をレビューし（対象論文⑤）、山岳遭難の要因となる登山者と登山道のマネジメントの観点から、今後の研究や取組・対策に係わる論点や検討課題を導出しており、今後のこの分野の研究を進展させる上で有用な知見を得ている。

以上の成果は、山岳遭難事故の減少や軽減といった社会的課題に対して、基本的な知見を提供するのみならず、先行研究との議論を含めつつ、予防対策に係わる基本的な考え方、具体的な対策、今後の検討課題等の有用な知見と提供しており、「学術論文賞」に値するものと判断した。

＜対象論文等＞

- ①小林昭裕(2020)山岳遭難記録に基づく、行動形態および山群、山城、個別山城内で遭難特性の比較検討. 環境情報科学論文集, 34, 1-6.
- ②小林昭裕・トマス・ジョーンズ(2018)ヒヤリハット体験における主因及び背景・間接要因の分析に基づく山岳遭難予防策の検討. 環境情報科学論文集, 32, 167-172.
- ③小林昭裕(2021)北アルプスの山岳遭難に対する登山者のリスク認識(注意、気づき)や対応の特性. 環境情報科学論文集, 35, 179-185.
- ④小林昭裕・トマス・ジョーンズ(2019)北アルプス登山者からみた登山者、管理者、ガイド・山小屋の山岳遭難に対する責任・役割. 環境情報科学論文集, 33, 187-192.
- ⑤小林昭裕(2022)山岳遭難要因である登山者および登山道に着眼したリスク軽減に関する一考察. 環境情報科学論文集, 36, 118-123.